

熊本県における麦類の経営的性格について

1 商品化率からみた地域性と階層性

天野 卯*・山部今朝則*

YANO, S. & YAMABE, K. Character of Wheat and Barley from Farm-economic Viewpoint

農業の近代化、合理化の終局目標は、経営の純収益を高めながら農業所得を増大し、商業的農業の発展を図ることにあるが、価格及び需給関係をめぐる経済的生産環境の変化に伴い、今後の麦作のあり方は経営的にも、技術的にも反省と検討が加えられなければならない。この様な生産環境にある麦作について、その生産費や労働生産性、土地利用形態(作付体系)並に商品化率と作付率、或は他作物との競合や代替補完関係を、地域別、階層別或は農家の類型別にはあくして生産方向と生産様式を規制している要因を明らかにするために、先づ商品化率について、二、三の統計的分析をこころみた。分析に用いた基礎資料は、昭和30年

3月、熊本県発行「昭和28年度農家経営経済調査報告書」¹⁾で、この報告書に記載されている調査町村数24、農家数80戸について、地域別、階層別、経営形態別に類型し、麦の作付率と商品化率とを算出して、商品化率と地域性と階層性及びその規制要因を明らかにしようとした。

1. 地域別²⁾、階層別にみた商品化率 地域別、階層別に商品化率をみると第1表の通りである。

即ち、最も商品化率の高い地域は、大矢野地域で約57%を示し、50%以上を示している地域は、菊池川流域、洪積台地、熊本市近郊地域、海岸低地地域を加え5地域となつている。最も低い地域は小国地域と、

第1表 地域別階層別に見た商品化率

階層別	種類別	地区名		中央低地地区							阿蘇地区		山麓地区	球磨地区	天草地区			平均
		地域名		菊池川流域	洪積台地	熊本市近郊	金峰山	海岸低地	南部山麓	小国	火口原	矢部郷	縣境山麓	下球磨	大矢野島	内陸	芦北海岸	
		小稈麦	麦計															
5 ~ 10	小稈麦	麦計	56.4 32.7 43.1		43.2 52.2 52.8			31.1 17.6 28.5				0 32.3 26.0	27.9 29.9 27.5		70.8 72.6 72.5	0 35.8 28.5	5.0 15.8 11.5	34.6 39.9 38.6
10 ~ 15	小稈麦	麦計	50.7 51.0 50.9	50.0 15.0 26.7	45.3 28.8 36.1	100.0 7.4 24.2	65.8 48.7 57.0	31.1 21.8 29.6	10.0 50.0 27.7		5.0 36.0 30.0		39.7 24.3 30.2	50.0 21.7 29.2	36.7 20.2 22.2	0 0 0	44.2 34.6 38.0	
15 ~ 20	小稈麦	麦計		54.2 48.1 52.0	55.6 40.4 45.2	0 1.8 1.3		65.4 58.7 66.5	0 0 0	23.8 27.3 25.7	1.3 1.1 1.2	60.2 38.5 46.6			0 42.1 30.0		52.8 40.3 45.9	
20 ~ 25	小稈麦	麦計	94.9 88.9 90.7	63.5 35.9 51.6	79.1 63.4 67.4		47.5 66.1 55.1		0 0 0		21.0 22.2 21.8						61.7 55.5 58.4	
25 ~ 30	小稈麦	麦計		78.8 56.5 67.8						18.7 88.2 37.4							42.9 59.5 62.8	
30 ~ 35	小稈麦	麦計		82.0 12.5 48.4						60.0 46.0 52.0							75.9 26.2 49.6	
平均	小稈麦	麦計	56.8 52.9 54.2	66.3 38.5 54.2	57.8 52.2 54.4	54.5 5.8 16.7	51.6 47.2 50.5	47.1 40.3 44.2	5.7 32.6 17.0	29.6 44.1 36.4	5.8 26.4 21.4	41.9 33.4 35.4	39.7 24.4 30.0	31.9 57.2 57.0	20.3 27.4 25.4	2.9 7.3 5.8	51.0 41.4 45.6	

* 熊本縣農業試験場

1) 九州農試経営部が、熊本縣の委嘱を受けて、簿記記帳を行わせて農家の記帳結果を集計したものである。
2) 地域区分は、熊本縣振興局の熊本縣農業地域区分試案による。(昭和26年10月による)

金峰山地域で夫々16~17%を示し、矢部郷地域の21.4%、天草地区(海岸島嶼地区)の内陸地域の25.4%がこれにつき、他の5地域は30~40%となつている。更にこれを稈麦、小麦別にみれば、小麦の商品化率が高い地域と稈麦の商品化率が高い地域とがあり、特に柑橘地帯の金峰山地域は稈麦に比し小麦の商品化率が高く、小国、矢部郷地域は稈麦が高い。階層別の商品化率は、経営規模が大になるに従つて商品化率も高くなつている。但し3町をこえると稍少なくなつているがこれは調査資料内における該当農家の数が少ない結果によるものと思われる。稈麦と小麦間では、2.5町~3町の階層を除き、何れも小麦が稍高い。特に3町~3.5町の階層においては約3倍を示している。

2. 麦類の作付率と階層別商品化率 麦の作付率と階層別、商品化率との関係については第2表の通りである。

即ち、作付率が増加するに従つて商品化率も高くなり、40~50%の作付率の農家では何れも50%以上の商品化が見られる。各階層間における商品化率は、5反~2町までは40%弱であるが、2町~3町において

は53~56%となつており、3町以上は稍少く約50%である。次に稈麦、小麦別の各階層間の差は、5反多~1町において作付率20~30%の場合は小麦が多く、30~40%は大差なく、40~50%では稈麦が多い。1町~1.5町では10%以下と10~20%並に30~40%の作付率を有する農家においては30%以下は稈麦が多く、それ以上は小麦が多い。3町以上の場合は何れも小麦の商品化が高くなつている。

3. 経営形態別にみた麦類作付率と商品化率 経営形態を耕種、養蚕、園芸、畜産、特作の5部門とその組合せによつて11の形態に分け³⁾麦類の作付率と商品化率を見ると第3表のとおりである。

即ち、50%以上の商品化率を行つている経営形態は、耕種のみ、耕種-養蚕-畜産、耕種-特作-養蚕の3つである。園芸を主とする経営と園芸が組合された経営では麦作は自給的性格が強く、畜産を含む形態も麦の商品化率は比較的少く30%程度である。総体的には作付率の増加に伴い商品化率も増加するが、作付率が20~30%から30~40%になると、耕種、耕種-養蚕、耕種-特作、園芸-畜産等においては商品化

第2表 麦の作付率と階層別商品化率

階層別	種類別	作付率	商品化率					平均
			10%以下	10~20%	20~30%	30~40%	40~50%	
反5~10	小稈麦類	麦			48.5	37.4	32.0	40.3
		麦計			26.1	37.7	74.8	40.1
10~15	小稈麦類	麦	1.0	22.2	44.4	45.7	48.4	44.0
		麦計	50.0	33.4	24.6	49.2	19.3	33.6
15~20	小稈麦類	麦	0	1.3	49.9	72.3		54.0
		麦計	14.9	1.9	55.6	29.4		31.9
20~25	小稈麦類	麦	12.0	23.8	63.5	59.2	79.2	60.0
		麦計	18.4	27.3	77.0	26.3	63.4	30.5
25~30	小稈麦類	麦		18.7		78.8		65.7
		麦計		88.2		56.5		59.1
30~35	小稈麦類	麦		60.0	82.0			75.9
		麦計		46.7	12.5			26.2
平均	小稈麦類	麦	6.8	25.8	52.2	55.2	54.7	51.8
		麦計	21.5	34.7	38.3	41.3	51.5	39.7
			15.5	30.4	44.5	48.9	54.4	44.2

3) 報告書では40数種に分類されている。経営形態の類型には種々の方法があり、類型の基準については多くの問題があるが、本報では報告書の分類を基にして部門別に分類した。

第 3 表 経営形態別麦作付率別商品化率作

経営形態	種類別		作付率					平均
	小稈麦	麦類計	10%以下	10~20%	20~30%	30~40%	40~50%	
耕種	小稈麦	麦類計			67.4	49.5	68.1	60.5
	麦類	麦類計			38.3	31.1	67.5	43.8
耕種・養蚕	小稈麦	麦類計	21.0		59.1	43.4		45.4
	麦類	麦類計	22.8		63.4	41.9		46.3
耕種・養蚕・畜産	小稈麦	麦類計			55.2	78.9		67.4
	麦類	麦類計			56.5	56.5		56.4
耕種・畜産	小稈麦	麦類計	5.7	26.4	12.8	63.8		32.1
	麦類	麦類計	32.6	34.8	23.7	47.8		34.6
耕種・畜産・特作	小稈麦	麦類計			46.9			46.9
	麦類	麦類計			25.2			25.2
耕種・特作	小稈麦	麦類計			50.0	66.7	48.5	52.7
	麦類	麦類計			51.0	15.0	31.1	37.9
耕種・特作・養蚕	小稈麦	麦類計			59.6	66.3		61.2
	麦類	麦類計			66.7	48.0		57.1
園芸	小稈麦	麦類計	0		100.0			54.5
	麦類	麦類計	18.4		7.4			5.8
耕種・園芸	小稈麦	麦類計		22.2	69.0		0	47.9
	麦類	麦類計		33.4	1.4		10.2	10.7
耕種・園芸・特作	小稈麦	麦類計		24.0	40.4		6.8	28.7
	麦類	麦類計			23.8			32.8
園芸・畜産	小稈麦	麦類計			16.7	3.7		8.9
	麦類	麦類計			57.1	41.5		48.2
平均	小稈麦	麦類計	6.8	25.8	50.4	52.0	56.4	49.5
	麦類	麦類計	21.7	34.5	39.9	41.3	55.2	42.1
			15.5	31.3	47.8	46.7	56.2	47.1

率が低下している。小麦、稈麦別に見ると作付率 20~30% の場合は、耕種、耕種一畜産一特作、園芸の形態において小麦の商品化率が高いが、作付率 30~40% になると更に小麦の商品化率の高い形態が増加する。稈麦の商品化率が高い形態は、作付率 20~30% では耕種一養蚕、耕種一畜産、園芸であるが、作付率 30~40% になると園芸、畜産の形態のみとなっている。

4. 摘要と結び 熊本県における麦類の経営的性格をはあくする第 1 段階として地域別・階層別経営形態

別麦の作付比率との関聯においてその商品化率を検討したが、これを要約すると次のようになる。

1. 麦類の商品化率は地域により 17% から 57% の開きがあり、最も高い地域は天草地区の大矢野地域と中央低地々区の 50% 以上を示し、次に山麓地区及び球磨地区の 30~40%、最も低い地域は阿蘇地区及び天草地区の内陸地域で 25% 以下となっている。

2. 種類別の商品化率においても地域性があり、中央低地地区並に山麓、球磨地区は小麦の商品化率が高く、阿蘇地区及び天草地区は稈麦の商品化が高い。

3. 経営規模が大きくなるに従つて商品化率も高くなる。稈麦と小麦間においては2.5町～3町を除き何れも小麦が高い。

4. 作付率が増加するに従つて商品化率も高くなるが、耕地面積が狭い場合には作付率の増加に伴い稈麦の商品化率が増大し、耕作面積が広い場合には作付率

の増加に伴い小麦の商品化率が高くなる。

5. 商品化率は経営形態によりいちじるしく異なる。

以上、商品化率からみた麦作の現象形態の一端を分析したが、このような現象を規制している経営経済的要因については、土地利用形態、労働構造等から総合的に検討されねばならないであろう。